日中病理学シンポジウムの偶然の立ち上げ

（2003 年度研究打ち合わせとミニシンポジウム）

蓮井和久
鹿児島大学大学院医歯学総合研究科感染防御学免疫病態制御学
2003.10.2-9

研究 3 年目の基盤研究 B 海外の研究打ち合わせに、2003 年 10 月 2 日から 9 日の日程で、中国の瀋陽を訪問した。

今年は、春の SARS 騒動、夏に中国の昆明で企画されていた第３回国際分子病理学シンポジウム（日本側会長：井内康輝広島大学教授）が SARS の為に延期となり、また、私は研究テーマが SARS と近いと云ったことから、海外学術総括班の会議で SARS について紹介させられることになり(海外学術総括班の HP)、昨年までと異なる状況での訪問である。

SARS 騒動の時にも、この中国の瀋陽市では SARS 患者の発生がなく、中国の航空会社であるが、福岡から瀋陽への直行便の運航が始まり、何等かのミニシンポジウムの企画をしようと試みた所、大阪大学の青笹克之教授、京都府立医科大学の中川正法教授、鹿児島大学皮膚科の神埼保教授の推薦による鹿児島の大島病院の皮膚科の川畑久先生の参加を得て、ミニシンポジウムを開催することが出来た。SARS の今年の冬の再流行が危惧され、その上に、中国の消費拡大の為の国慶節の休日が 10 月 1 日から 7 日と突然延長された中での訪問であったが、ある意味では、非常に実り多い研究打ち合わせ訪問となった。

鹿児島を 10 月 2 日（木）の２時前に出発し、福岡から、6 時の中国南方航空の瀋陽行きに搭乗して、中国時間の 7 時半過ぎに、瀋陽の空港に到着した。非常に搭乗客の数が少なく、客としては快適であったが、この便は何時まで続くのかと思えた。シベリア寒気団にて相当に寒くなるといった情報であったが、鹿児島の初冬といった感じであった。空港で、入国審査を終えて、荷物の持って出ると、半年ぶりの賈心善教授と彼の大学院学生の丁先生との再会が出来た。

今回の訪問とミニシンポジウムは賈心善教授が公式の行事と中国医科大学に申請したとのことで、全ての移動は、中国医科大学の公用車ですることになった。

昨年の訪問の時に、出来た空港の建物であるが、昨年はまだ周辺に工事中の場所があったが、今年は空港から市中に向かう高速道路の改良工事とかで、ホテルへの道を運転手が間違える程であった。また、丁度、この時期に開催される国際塘酒見本市で中国各地の酒の看板が町中に氾濫していた。

翌日（３日（金））は、国慶節最中で、ホテルで書き物をすることになった。賈心善教授も、兄弟家族が集まるとのことで、お昼に、少し必要となった買い物に付き会って頂いたが、のんびりとしたホテルライフを過ごした。後日解ったのだが、休日中は大学の建物の水道が、誰もいない間に溢れたりすると困るので、元栓が閉められ、また、インターネットの

利用も出来ないとのことであった。夕食は、始めて独りで宿泊したホテルのレストランすることにした。さて、なにを食べるかとなって、チンジャオロースと云うと、メニューにはないけど、作ってあげるとのことで、中華スープと青島ビールにチンジャオロースに満足した。

ホテルの窓から中国医科大学を望む

ホテル前の交差点（自転車に代り多くの車が）

ライトアップされた瀋陽南駅

安山の仏教寺院（丁先生、青笹教授、賈教授）

21世紀広場で（青笹教授、賈教授と私）

賈教授夫妻の招宴

翌日（4 日（土））は、阪大の青笹教授が来るとのことで、私も迎えに行くというと、車に乗り切れないとのことで、ホテルで待つことにした。中国医科大学の日本語コースと英語コースの卒業生の大学院学生のペアが迎えに行くことになっているとのことで、賈心善教授と共にホテルで、青笹教授を迎えた。いたる所で再開発が行われて、市中の大型ショッ

ピングセンターに入ると、ここは中国といった印象を持った。その夜は、賈心善教授夫妻の招待で、中国式の食事を青笹教授と共に満喫出来た。昨夜のチンジャオロースのことを聞くと、所謂、家庭料理で、レストランのメニューにはないのが普通とのことだった。

翌日は日曜日とのことで、郊外の安山市の仏教寺院にギネスブックに載った世界最大の玉石に、仏を刻んだものを一見の価値があると勧められたとのことで、賈教授、丁先生、青笹教授と私で、約２時間のドライブを楽しむことになった。シベリア寒気団の下降もなく、快適なドライブであった。その玉石の仏像は、玉石の模様に合わせて、色々な中国的な物語が出来ているようで、少し面白い模様を見つけたら、物語を作ったらと冗談混じりに勧められた。安山からの帰路に、瀋陽空港近くの 21 世紀広場を訪ねた。メモリアルの周囲に著明な学者やノーベル賞受賞者のブロンズ像が関連した物と共に配置され、中国は学問の国で、非常に教育熱心であることを再認識させられた。夜に、川畑先生が私の同じルートで到着し、ホテルのレストランで、青笹教授と共々青島ビールで祝杯を上げた。再度、チンジャオロースを頼んだ所、どうにか日本語を話すウエイトレスが頼んで作って頂いたが、かなりコックさんには不評であったようで、翌日、中川教授が揃って、４名での祝杯をとレストランに行くと、コーヒーショップでと入場を断られてしまった。しかし、皆、フランスと中国の合弁会社の中国ワインを満喫できた。

翌週の月曜日である 6 日も、大学はお休みとのことで、郊外のマジックスロープと云って、下り坂なのに、ニュートラルにした乗用車が坂を登る不思議な場所に案内して頂いた。中国の専門家が検討したのだが、その原因が不明とのことであった。瀋陽の郊外には世界最大級の背鍾乳洞もあり、非常に興味ある地形であるのかも知れない。午後は、中国に現存する２つの故宮の一つである清朝が北京入場する前の清陽の故宮を訪ねた。以前は、余り手が加えられていない感じであったが、世界遺産に登録するそうで、かなり管理されているようであった。この日の午後に到着した中川教授が揃った所で、賈心善教授の現在１４名になる大学院生との夕食会を行われた。全て、女医さんで、賈教授の所には、どういう理由か、女医さんばかりが集まるのだそうである。兎に角、４名の日本からの共同研究者の訪問を歓迎すると盛大な宴となった。賈教授は日本語で歌えるので、日本語のカラオケマイクをプレゼントしていたのだが、それで、各自、歌わされることになった。当然のことながら、私の歌が最低の評価であり、また、青笹教授の歌を聞けて、また、若い川畑先生の非常に上手い歌に感心し、中川教授の味のある歌を聞き、更に、賈教授の流暢な日本語の歌にて、この夕食会は盛大に終わった。

今回の研究打ち合わせに平行して行う**ミニシンポジウム**は、国際分子病理学シンポジウムが、基本的には、中国各地で、特に、未だ学会等が開催されていない所を含めた形で企画され、かつ、中国との文化交流も行うとするものであることから、その中国のまとめ役で

ある賈心善教授の所属する中国医科大学での定期的な日中の病理学分野での交流の場を設立したいと思い企画されたものです。中川教授からは、今回の参加者はこの学術調査の分担者か研究協力者ですが、学会組織運営にすればより参加が容易になるとの示唆があり、次年度からの企画は、丁度、**日中病理学シンポジウム**と名前も付いたことだし、そういった運営組織体の設立を目指したいと思っています。

翌日（７日（火））は、結果的に、賈教授が日中病理学シンポジウムと呼んだミニシンポジウムが午後開催された。午前中から会場となった中国基礎医学学院の３階の会議室ないし AV 教室にて、コンピューターと液晶プロジェクターとの調整を行うと共に、各講演者と日本語から中国語への通訳者（大学院学生ないし若手研究者）との打ち合わせが行われた。また、青笹教授は、現在、賈教授の収集している鼻 NK/T 細胞性リンパ腫の標本が見たいとのことで、20 数例の検鏡を行われた。昼食に、１時間程の余裕があったので、昨年の昼食ととった日本食レストランを訪ねた。丁度、日本領事館そばであったので、現在の事情と見ると、領事館前の道への車の乗り入れは禁止され、領事館の回りの歩道は歩けない形で、鉄条網で守られていた。賈教授に聞くと、数年後には、この並びの日米の領事館ないし大使館は別の場所に移動するとのことであった。瀋陽の日本領事館のウオッチャーの楽しみも今年か来年が最後になるようである。賈教授を交えて、天井で腹ごしらえをして、ミニシンポジウムに望んだ。

ミニシンポジウム（第１回日中病理学シンポジウム）

１）青笹克之：鼻 NK/T 細胞世リンパ腫

２）中川正法：神経疾患の分子病理学

３）川田久：皮膚の悪性リンパ腫、

４）蓮井和久：超高感度免疫組織化学

５）賈教授の大学院学生の何先生：中国での研究を進めている段階の一つのまとめ

病理学教室の主任の王教授も、賈教授と共に、各講演の座長とすると共に、中国への通訳が辿々しくなると、適切な通訳を示唆され、日本語クラスの学生 50 名余りと病理学関係者によるミニシンポジウムは無事に終了した。

今回は、中国でも SARS の再流行を恐れていることから、他地域の関係者への参加要請を行わなかったとのことであったが、今回の成功で、次回は中国各地の関係者の参加があるだろうと賈教授は言っていた。

ミニシンポジウム後に、青笹教授の中国医科大学客員教授称号の伝達式が、学長事務所で行われた。韓副学校長が学長に代って伝達式が行われた。ミニシンポジウムの講演者の我々にも中国医科大学の名前の入ったネクタイが贈られた。

夜は、基礎学院長の解剖学の柏教授と現在副学院長の病理学の王教授、病理学教室の副主任の岡教授に、通訳をしてくれた若手研究者と賈教授夫妻の参加によるミニシンポジウムの打ち上げが、瀋陽の餃子専門店の老舗で開催された。この老舗は、２、３年後には都市再開発で無くなるそうで、観光客も訪れる老舗だが昔の中国の情緒溢れる町並みが超現代的な街に変身するとのことであった。ホテルに戻り、日本側参加者でのワインでの二次会で、参加者間の歓談を行い、楽しい時間を過ごした。

翌８日（水）の早朝に、中川教授が帰国するのをホテルで見送り、8 時からの青笹教授の日本語クラスでの腫瘍総論の講義があった。いわゆる現代の病理

学は、器官病理学、組織細胞病理学を経て、分子病理学に入った歴史的な解説に始まり、日本の山際先生のタール癌を説明をされて、現在であればノーベル賞ものであり、日本に実験化学発ガンのパイオニアであることを説明され、現代のウイルスや遺伝子異常による腫瘍発生のメカニズム等を簡潔に説明された。スライド係りとして参加して、私の勉強にもなり、青笹教授の博学を再認識させられた次第である。

正午前に、帰国される青笹教授をホテルで賈教授、川畑先生と共に見送り、今回の訪問でのお土産を暢達にのんびりと市中のデパートを回った。

夜は、ミニシンポジウムで通訳してくれた大学院学生２名と大学院学生の責任者である丁先生、それに、今年の４月に賈教授と共に鹿児島を訪ね、野添良隆先生の世話でコンサートをした張さんを誘い、今回の研究打ち合わせの打ち上げを行うことにした。現在、張さんは空調関係の会社の副社長だとのことで、招待したところ、反対に皆ともども招待されることになった。海鮮レストランでの食事になった。川がにやしゃこが出て来て、皆、美味しく頂いたのだが、どうも私は形のある蟹料理は少々苦手というと張さんと大学院学生の王さんが食べ方を教えてくれた。しかし、やはり、蟹は形なく料理されたものが良いなと内心は思ったところ、大学院学生の王さんも同様なことを言っていた。大学院学生の丁先生は、今年度が最終学年になり、大学院修了後には、広州に職を見つけたいとのことであった。子供を故郷の両親に預け、広州で夫君が仕事をされているとのことで、休暇の度に、中国の東部を縦断するとのことであった。中国での汽車旅行の費用を聞くと、300 元（日本円で 4000 円程度）前後とのことで、その安さに驚くと、その代り、汽車旅行には体力が必要とのことであった。

中国の研究者の収入等を聞くと、若手の助手が 3000 元（3 万円前後）で、博士過程の大学院学生には 300 元程の基本的な奨学金と講義や実習の助手である程度の謝金が出るとのことであった。中国の物価は日本の 10 分の 1 程度であることが解ると共に、デパートの食品売り場での各食品の安さに感心していたのであるが、いくら日本と比較すれば安い設定になっている研究消耗品も、一つ一つが月収に相当する高価な研究消耗品であることが理解できた。大学院修士過程での教育がペーパー上での模擬実験であったり、普及してきたコンピューターとインターネットのよる学問的内容の収集に熱心である中国の若手研究者の背景の一つを知ることが出来た。

翌日（9 日）は、学長も使うという公用車で、空港まで、大学院学生の王さんが同乗して送ってくれた。川畑先生との同時の帰国であるので、車に乗り切れないとのことで、ホテルで賈教授と別れた。空港に着くと、国際線への搭乗手続きカウンターが見当たらず、その方向に多くの人だかりが見られた。SARS のチェックのゲート前にて、どう言う訳か、多くの人が集まっていた。関係書類を提出して、やっと搭乗手続きを終えた。

手荷物検査で、今回はワインを手持ちで持って帰ることにしたのだが、ワインを中国では手荷物に出来ないとのことで、再度、搭乗手続きカウンターで預けることになった。今回の訪問では、同時期に、糖酒見本市が行われるとのことで、市中のホテルのロビーでも、コンベンションセンターでも、各酒造メーカーの展示や接待で混雑していた。私もこの機会に中国のワインをと思い、賈教授に相談していたのであるが、この見本市でアルバイトをしているらしい学生さんに賈教授が聞くと、個人対象の見本市ではなく、また、日本への郵送を郵便局に訪ねて頂くと、引き受けできないとのことであった。仕方なく、デパートのワイン売り場を覗くと、中国では濃縮されたワインとそのままで飲めるワインが同様に売られていた。原料ワインが所謂濃縮ワインで、これに適当量の水を加えて飲むという。初めて見る濃縮ワインであった。しかし、適当な４本のワインを購入して、ナップサックで手荷物で持ち帰ることにした。

どうにか、福岡行きの直行便に乗ると、多くの日本への留学生が搭乗してきて、満席となった。福岡瀋陽間のこの便は、日本からより中国から日本への留学生等で一杯であることが解った。更に、アナウンスによると、ピョンヤンとソウル上空を経て福岡に向かう最短コースとのことで、２時間半弱で福岡に到着した。そして、福岡から鹿児島への一便前に搭乗することが出来た。

今回の研究打ち合わせでは、研究の順調な進行が確認され、更に、偶然にも、日中病理学シンポジウムを SARS の置き土産として立ち上げることが出来たことは大いなる収穫であった。